上田市の戦争体験者 からの聴き取りを通して学んだこと

長野大学社会福祉学部
山浦ゼミナール

〈新聞で語り部を募集〉

- 信濃毎日新聞で呼び掛け
- ６月から取材を開始
- 成果は記録集にまとめる

２０２２年５月２５日付の信濃毎日新聞で活動内容が掲載されました。

〈インタビューは継続中〉

- 右は、上田市浦野公民館での 取材の様子。

- 本日は、成果の一部をみなさんに 紹介します。

- ２０２２年６月７日付の信濃毎日新聞で活動内容が掲載されました。

【聴き取り①】

荒川キヨさん（93）上田市八木沢

- 父、荒川盛活さん
- 兵役のため仙台に。満州を経た後ガタルカナル島へ行く事に。
- しかし上陸手前で爆撃に遭い、仲間と共に泳いで付近の島へ。
- マラリヤや食糧不足により仲間達が次々と倒れた。
- 「蹴飛ばすほど死体があった」

- ビルマ、インドを経て二年後、新潟へ生還。亡くなった戦友 の小指を16本持ち帰って、 遺族の元へ届けた。

- 日本に戻ってきた直後は、療養施設に。戦地にいた頃の恐怖から体の震えが止まらなかった。

荒川盛活さんとその奥さん

【聴き取り②】

黒坂 明さん　(88)上田市前山

- 当時、千葉県の習志野市に在住。 実家は、陸軍御用達の写真屋。
- 軍国教育をうけた小学校時代。

朝礼で、歴代天皇の名前を暗唱。

- 勉強はほとんどせず、戦争のため に農家の手助けや松脂採集。

- 体罰が当たり前にあり、連隊責任でクラス全員が殴られていた。

- 日本は、「神の国」。戦争には,必ず勝つと教えられていた。

- 当時の子どもは、軍人に憧れ敬礼を真似たり、兵隊帽を欲しがったりして いた。

写真は、小学校低学年頃の黒坂明さん

【聴き取り③】

渡辺三樹子さん（94）上田市浦野

- 終戦当時、青木で小学校の先生をされていた。

　当時は教師が足りなかったから高校を卒業してすぐに教員免許なしで教師になる人が多かった。

渡辺さんもその１人。

【学生時代のエピソード】

- 染谷丘高校専攻科を卒業。
- 英語教師に憧れ、英語が好きになり学びたいと思うようになった。しかし、英語は敵国語のため当時の日本では話すことは禁止されていた。学ぶことができなかった。
- 制服がとても可愛くて気に入っていた。しかし、非常時にすぐに身動きがとれるよう、制服ではなくもんぺを履かなくてはいけなくなった。「お洒落をする」という意識は段々薄れていった。

【聴き取り④】

仮名小林さえ(100) 上田市八木沢在住【当時電話交換手】

- 戦争時の東京は毎晩200機ほどの軍用機が襲来。

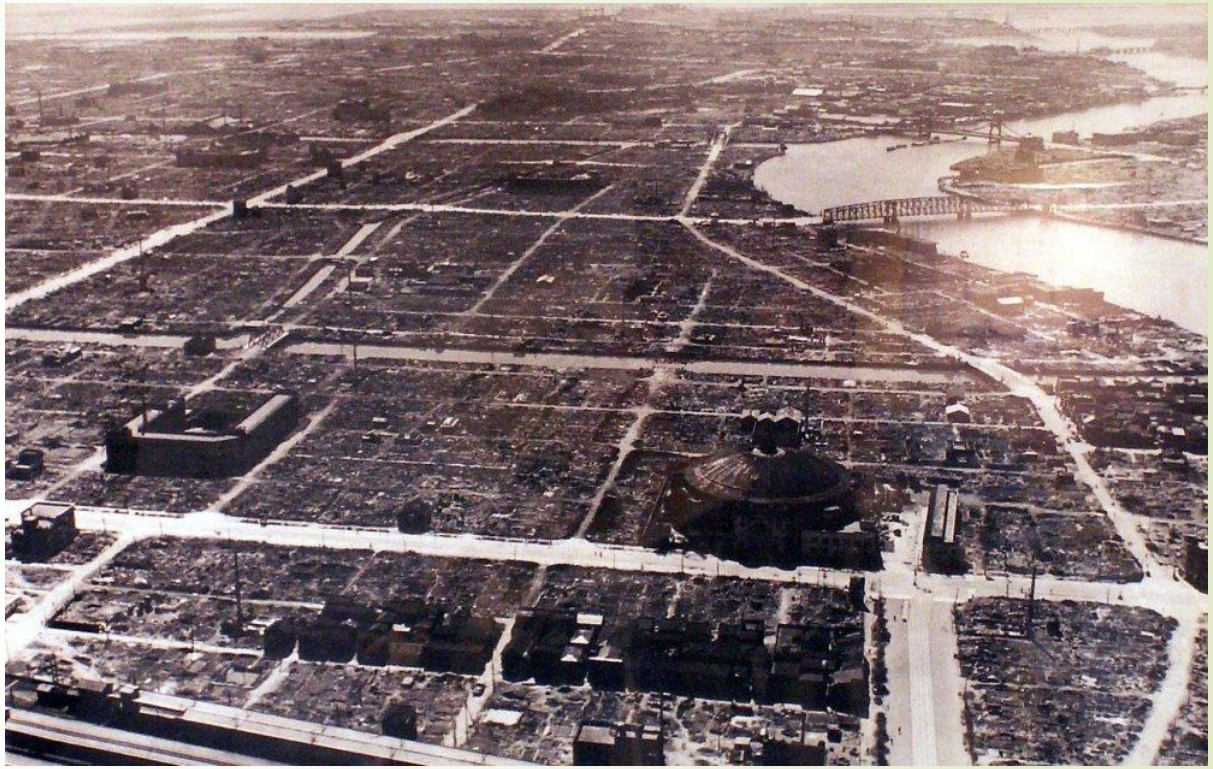
  →夜は焼夷弾、昼は爆弾を投下していった。

- 大型爆弾は家が50軒、小型爆弾は家が20～30軒、一瞬にして吹き飛んだ。

【　東京大空襲　】

▶電線には、いくつもの死体が引っ掛かっていた。

　妊婦さんの死体からは、赤ちゃんが半分出ており、水が滴り落ちていた。



Wikimedia Commons より引用（1945年3月10日米軍撮影）
ライセンス：public domain

【　東京大空襲　】

- 神田川周辺にいたので、神田川へ飛び込んだ。神田川が埋まるほど死体もあったので、3～4時間交代で人々が川に入った。

- 川から上がって辺りを観たら皆亡くなっていた。

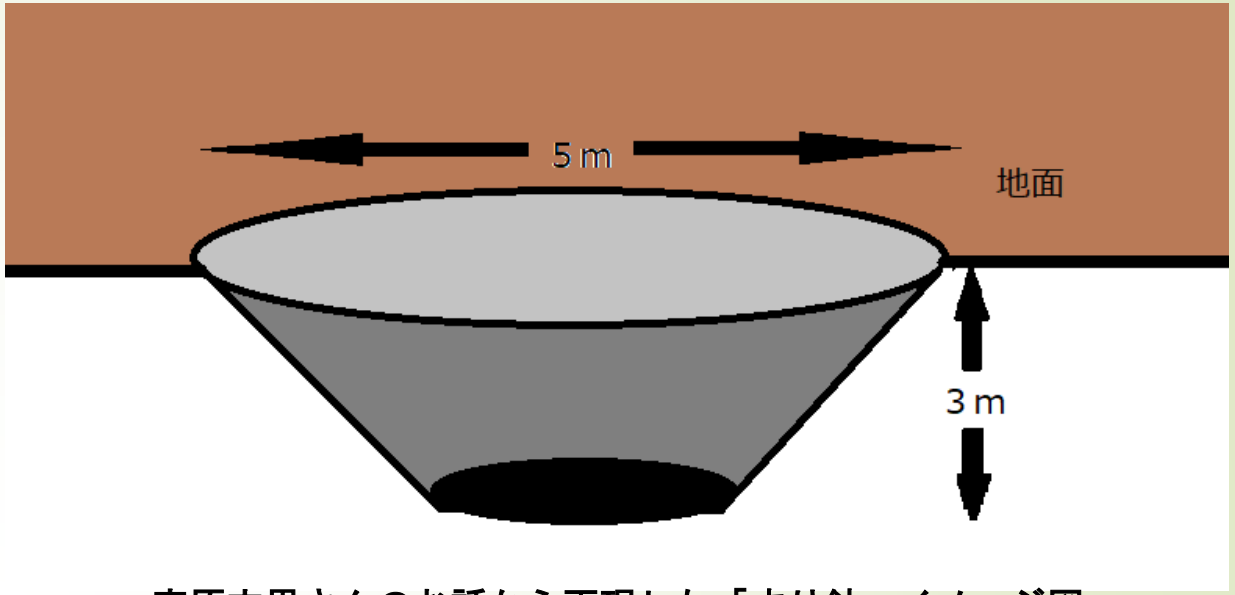
  - 本所深川周辺の川は死体で埋まっていた。片付ける人がいないため、中には3年間くらい放置されている状態の死体もあった。

【聴き取り⑤】

宮原　文男（８４）上田市武石

武石のすり鉢

- 父が戦死
- 母の言葉「戦争なんか大嫌い。おかげでこんな目にあわされてしまって」と生涯、戦争を憎んでいた。
- 戦争はまっぴらごめんだ



宮原文男さんのお話から再現した「すり鉢」イメージ図

- 武石村にはすり鉢状の穴が存在した。
- 武石小学校の現在の屋外トイレの場所に穴は存在した。
- 当時の遊びはこれしかなかった。
- 少年航空兵の育成のために作られたもの。
- 終戦が知らされた次の日、一夜にしてこの穴は消えた。

【聴き取り⑥】

松野幾代さん（９６）上田市中央

・戦争当時、挺身隊として富山の
　不二越へ。
・挺身隊とは戦争による労働不足を
補うために地域や学校別に隊を作り、
各地に派遣されて労働を強制したもの。
・松野さんは副隊長を務めた。
・決まって夜9時に長野の方を向いて
　泣きながら故郷の無事を祈っていた。

写真は松野幾代さんご本人提供

【富山の空襲】

・1945年8月　富山での空襲は、花火のようだった
・死体をよけて避難し、土蔵の下で人が燃えているのも見た。
ふすまと芋、豆、パンやせんべいを食べていた。

※ふすま
小麦粉のかす。「ふ」のようにして食した。通常は、牛馬の飼料。

【兄の死】

- 兄は4人おり、皆兵隊として戦地へ
  そのうち2人は沖縄で戦死。
  戦死報告を受けた父は泣いていた。

- 戦争は絶対にやってはいけない、
  今は豊かすぎます。
- 戦争経験を聞く機会が減ってきて
  いる。

松野幾代さん

【聴き取り⑦】

宮島　満里子さん(96)

- 当時、教師を目指して専門学校に通っていた。
- ４年間のうち学校で授業を受けたのは２年間だけ。
- 学校生活のほとんどが軍事教育と勤労動員。
- 戦後、国語教師になる過程で民主主義を叩きこまれた。

- 家族と離れ、東京の工場で勤労動員に従事。
- 空襲警報が鳴ると地下に避難、警報が止むと工場で作業という生活。
- 東京を襲った激しい空襲を多く体験する。
- 空襲の後、丸焦げになった遺体が周囲にいくつも転がっており、涙も出ず恐怖も感じない極限状態で茫然とした。
- 「二度とこのような体験はしたくない」

- 空襲で住んでいた寮が焼失したので、別の寮で過ごすことになった。
- 公爵の家を寮として利用していて、シャンデリアやピアノが置かれていた。
- 一緒に空襲から生き延びた友人がショパンを演奏してくれた。
- 空襲警報が鳴っても、みんな庭に出て演奏を聴き続けた。
- 今でもこの演奏が心に残っている。

【次世代へのメッセージ】

- 小山みき子さん（97）

戦争があと１、２年早く終われば、 兄たちは死ななかった。
絶対に戦争をしてはいけない。 戦争がひどく憎い。

- 小山和弘さん（85）

戦争はいけないことだと いう認識を持ってほしい。

- **渡辺三樹子さん（94）**

若いみなさんがうらやましい。

好きなことを自由にめいっぱい学び、 やりたいことにどんどん挑戦してほしい。

水出照子さん（93）

終戦後も２年ほどは生活用品
の 配給制が続いた。
戦争は人と人との殺し合い。
絶対に繰り返してはダメ。

- <u>小泉照美さん（94）</u>

戦争は絶対にしてはいけない。

今の平和な世の中は夢の夢

【活動を通して学んだこと】

１　戦争を体験した人達から当時の話を聞くことは、教科書では知ることができない生々しい出来事や戦争の真実を知ることができた。

２　家族や仲間を失うことの悲惨さを改めて感じたこと。

３　私たちの活動を通して、戦争について誰もが興味を持ち、自分事として考えることが大切。

　戦争体験は、決して風化してはいけないものだという認識を持って平和の尊さを感じてもらいたいと強く感じました。

ご清聴ありがとうございました。